

第2問 次の文章を読み、以下の問1と問2に答えなさい。

中高生の頃、学校の先生がよくこう言っていたことを思い出す。「社会は厳しいぞ」、「社会に出たら通用しないぞ」。

そう説教された生徒の側はといえば、「先生こそ社会に出たことないじゃないか」と陰で反発するのが常だった。そして、同様の物言いは大人の口からも、まさに常套句として発せられがちだ。「学校の先生は社会に出たことがないから常識がない」、「社会人として揉まれたことがないから、教師には未熟な者や非常識な者が多い」、等々。

しかし、そこで言われている「社会」とはどこのことだろう。「社会に出る」とは何をすることを意味するのだろうか。「社会人」とは誰のことを指すのだろうか。

「社会に出る」ということが、たんに教職以外の業種の仕事に就くことを意味し、「社会人」とはそうした仕事をしている人のことを指すのであれば、社会に出ることも社会人になることも至極簡単だ。そして、どの職種や職場にも、未熟な者や非常識な者が嫌というほどいることを、私たちは知っているはずだ。同じ仕事を続けている人であろうと、転職を経験した人であろうと。

なかでも厄介なのは、ひとつの場所に慣れて未熟ではなくなったベテランが、それゆえに偏った考え方に凝り固まってしまうケースだ。年を経て経験を積むごとに、当人にとっての「社会」はかえって狭くなる傾向すらあるのだ。

「社会」とは、決して一枚岩ではない、多様な人々が直接的・間接的にかかわり合いながら生きる場だ。その意味では、子どももすでに社会に出ている。そして、彼らにとって社会は決して楽なものではないし、大して守られているわけでもない。日々膨大(ぼうだい)な務めを果たし、大人と同様のシビアな人間関係——しかも、大人よりも遙かに露骨な人間関係——と、直接的な暴力の危険に曝されている。

私たちはよく、子どもの頃に戻れたら、と夢想する。けれども、もしも私が頭の中はそのまま体だけが小学生になり、あの名探偵コナンのように子どもとして暮らすことを本当に強いられるとすれば、私はその状況にとっても耐えられないと思う。

では、「ひとり立ちする」ことが「社会に出る」ことなのだろうか。いや、文字通りの意味で自立している大人など誰もいない。その仕事や生活が、どれほど多様な人々に依存していることか。

脳性麻痺の当事者である医師の熊谷(くまがや)晋一郎(しんいちろう)さんは、あるインタビューのなかで、「自立」の反対語が「依存」だというのは勘違いだと指摘している。たとえば熊谷さんが挙げているのは、東日本大震災のときに職場のエレベーターが止まり、自身が五階の研究室から逃げられなかったエピソードだ。健常者であれば、エレベーター以外にも階段やハシゴという別の依存先もあるから、下に降りられる。しかし、身体が自由が利かない熊谷さんには、そのときエレベーターしか依存先がなかった。

熊谷さんによれば、「依存先が限られてしまっている」ということこそ、障害の本質にほかならない。逆に言うなら、「実は膨大なものに依存しているのに、「私は何にも依存していない」と感じられる状態こそが、“自立”といわれる状態」だということである。

健常者は何にも頼らずに自立していて、障害者はいろいろなものに頼らないと生きていけない人だと勘違いされている。けれども真実は逆で、健常者はさまざまなものに依存できていて、障害者は限られたものにしか依存できていない。依存先を増やして、一つひとつへの依存度を浅くすると、何にも依存していないかのように錯覚できます。“健常者である”というのはまさにそういうことなのです。

誰でも、否が応でも、すでに社会に出ている。にもかかわらず、敢えて「社会に出る」と言うのであれば、それは社会の多様な場所、多様な側面にかかわるようになることを指す——そう私は理解したい。ひとつの場所の方法や慣習にただ順応するのではなく、むしろそれを相対的に見て、別の可能性を想像できる場に立つことを意味する、と考えたい。

繰り返すように、社会は一枚岩ではない。「社会は厳しい」のではなく、社会は特定の人々に厳しい。敢えて「社会人」という、ある者を別の者と区別する言葉を用いるのであれば、社会の偏った厳しさを和らげようと努め、相互依存の網の目からこぼれ落ちる人々に手を伸ばす者を、「社会人」と私は呼びたい。

(古田徹也『いつもの言葉を哲学する』より作成)

問1 筆者が下線部のように主張するのはなぜか、その根拠を含め150字以上200字以内で述べなさい。

問2 本文で主張されている自立と依存の関係について、本文の例以外に具体例を挙げ、400字以上600字以内で説明しなさい。